

犠牲者の霊に献げられた

怒りの…… 弔詩

俺達の生命は
狙われている

中山和正

おそいかかってくる
真黒い煙が
すくすく牙をむいて

昭和四十二年九月二十八日
二川鉱にて 又も

尊い仲間達の生命が
奪い去られた
むさうにも
三井鉱山のあくなき
黒い牙によって

CO立法をなすものに
しようとする
奴等の牙はとがれ 光って
罪なき仲間が 又も
殺された

炭坑の中に
竹を敷いたばかりの中に
無造作に投げ込まれる
会社の生にえにされた
仲間の遺体
会社の傍らにぞくする

とらあつかいの非情さ

保安は万全です

これで災害はありませぬ
日本一の保安炭鉱になりま
した

安心して仕事して下さい
爆発後の会社幹部の
自信たっぷりの発言

だが

傍らに仲間達は いつも
危険を冒していた
鉱山の災害は
当然の様に
保安を無視し続ける
三井鉱山の幹部

気やすめにも
自己救済器 ガスマスク
死物狂いでつけた
ガスマスクが

何のたしにもならなかった
本間に命を救えるマスクを
つくるのに二三年
かかるという
できるのだろうか
信じられるのだろうか
その間にも 仲間の命が

寝ていても息子に 殺されは……と

—CO患者の父親の恐怖

「人間の叫び」から

昭和三十八年、三井大炭坑で
CO中毒となり、現在労災補償
を打ち切られたTさん一家の生活
は、つぎのようになり三井大炭坑から
タダにひきまがられ、破壊され
てしまった。Tさんの奥さんは、
Tさんが爆発にあわると、ガス
保安サボで 次々に
奪われるというのに

三井よ悔じよ

のだきんぞう

日本の富を
その独占の爪に奪い
人間を
合理化の爪に奪い
再び、そして三たび
その血に舌をなすり

宣浦でも 四山にも
他の個所にも

危険が満ちあふれている
災害が起る条件は
いつも消えないのだ

四百五十八名を殺して
八百二十二名のCO患者を
つくってしまった
幹部連中はいつ
一切の責任は
ありませんでした

今度は俺たちに
おそいかかってくる

黒い牙

生き残った者に
おそいかかってくる

俺たちの生命は
狙われている

傍らに仲間の尊い生命を

ら、百円で四、五百分のオカズ
を買って、ただものを食べるだけ
の暮しを細々とつづけていた。
息子は気が悪いと、おじい
さんをナグル、ケル乱暴をはた
らき、そんなとき、おじいさんは
『殺されはしないか』と思うそう
である。

おじいさんは『息子が病院から
土曜日に帰って来ると、夜は恐ろ
しくて寝られん』と、オレが
寝るとき、息子が殺しやせんか
とビクビクして布団にくるまって
えうしてしよんなか』
実の息子から殺されはしないか

鬼畜生

人間の皮をかぶった
吸血鬼

四百五十八名を殺し
八百二十二名の生証人を
マッ殺し
更に四十人を殺し
一年間
四千人以上の
重傷傷の患者を生産

これらの傷跡も癒えない
三井大炭

保安の目せかけから
旧坑で自然発火
COガス発生
七名の尊い仲間の生命を
また間絶させて
奪った

現場で

まじめに働いていた
五百名の仲間達はまた
COガスを吸わされた

自己救済器も
気やすめでみせかけばかり
その救命器をまっとうに
死んで行った仲間

俺達は
どうすればよいのか

炭鉱労働者の
と根性と
情熱を燃やし
団結して闘う以外に
道はない

新労組の
仲間と
話し合おう
三井労組は
闘いに

展望を持って
俺達はつくり出すのだ
労働者が
安心して働ける
現場を

母ちゃん達が
傍らに仲間を
生活できる社会を
鬼共が
のさばらなく
世界を

涙

森川久美子

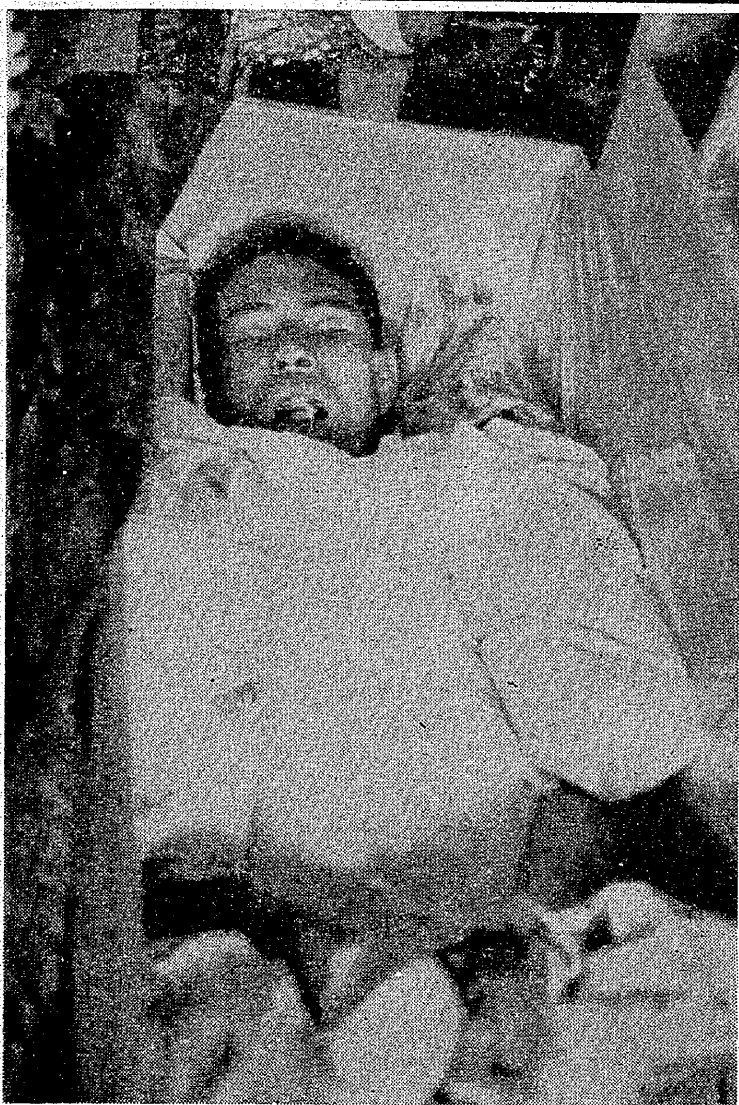
くやしさにこみあげる涙
流れても流れても
流れることを知らぬ涙

また大災害で死に七人
現実のきびしい
組織裏切りに
憎しみをこぼえ
生きる苦しみ耐える

胸につかえる怒りの回りが
炎となって目から
ジーンと熱さを
ジーンと熱さを

生きる限り
闘いつづける限り
涙は流れることなく
湧きつづける

高橋さんからも長詩が寄
せられていますが、次号
に紹介します。



柩の中に眠る上村さん
も早や永遠に帰らず